

川 端 康 成 論 考

増 補 版

長谷川 泉 著

明 治 書 院

著者略歴

大正七年二月千葉県生。一高をへて昭和
一七年東国文学科卒業。東大大学院修了。
清泉女子大教授・東大講師を歴任。
現在、医学書院編集長・学習院大講師。

主要著書

「森鷗外」「森鷗外論考」正・続「鷗外
『平タ・セクスアリス』考」「近代文学研究
法」「近代日本文学——鑑賞と研究」（明治書
院）「近代名作鑑賞」「近代日本文学思潮史」
「方法と様式」「近代日本文学の展望」（至文
堂）「近代日本文学評論史」（有精堂）「近代
日本文学の機構」（瑞書房）

川端康成論考 増補版

昭和四十年六月二十日 初版発行
昭和四十四年六月十五日 増補版発行

¥ 1,800

著者

東京都文京区西片一ノノ一
◎長谷川 泉

発行者

株式会社明治書院

代表者 三 樹 彰

印刷者

大文堂印刷株式会社

代表者 梶原 忠 幸

発行所

株式会社明治書院

東京都千代田区神田錦町一ノ二六
郵便番号 一〇一

電話東京(03)三四一五三六(代)
振替口座東京四九九一番

△検印廃止▽

増補版 序

本書の初版の序において、私は川端康成のはらむ可能性への期待の大きいことを述べ「その期待は、ただに日本というわくをも越える。」とした。日本人の作家として最初のノーベル文学賞受賞、インドの詩人タゴールについて、東洋では二度めのノーベル文学賞受賞の事実は、その期待の大にこたえてくれたことを喜びたい。

川端文学は世界文学の視圈のなかでの論議を浴びることになった。日本文学の伝統的系譜のなかでの特色も、改めて掘りさげられている。川端文学の本質は、ノーベル賞受賞によって、いささかの改変をも示さないであろう。あらゆる批評を拒絶する川端文学の強靱な本質がそうさせる。そのようなことは、本書の初版の序においてしるしたところであるが、今再び改めてそのことを痛感する。川端のノーベル賞受賞記念講演「美しい日本の私——その序説」は、生活の場においては含羞の姿勢を示す川端が、文学の場においては、きわめて強靱であることの姿勢を、事実をもって顕現したものであった。

今回、本書を増補するにあたっては、主として作品論を増加するようにつとめた。増加した論文は「川端文学とノーベル賞——盈虚の美学の微茫な接点——」「十六歳（十四歳）の日記」「招魂祭一景」「浅草紅団」「千羽鶴」と『山の音』——『ほくろの手紙』『水月』に触れて——「古都」「眠れる美女」と『片腕』「川端康成における詩と真実」である。

初版の「伊豆の踊子」論は、ただに「伊豆の踊子」のみの論考にとどまらず、多くの他の作品論にも及んでいた。筑摩書房版「現代日本文学大系52」の「川端康成集」に転載された際「特に川端康成の初期の作品群に照準をあてて、歴大な資料を背景に、よくその解明をなし遂げている点で、近來の川端論の中でも労作のひとつに数えられております。」「特に習作時代や初期作品に綿密な考察が加えられ、川端研究の新しい段階を開く書となった。一高時代、『校友会雑誌』に発表された『ちよ』についての紹介もおこなわれている。」というような評価を得た。ゆえに、今回の増補版では初版の際の題名に「——『ちよ』『少年』『美しさと哀しみと』に触れて——」という副題を付して内容の一端を示すようにした。

「雪国」論は「三」の部分に増補した。

口絵や扉の部分の写真は増加し、そのほか年譜の補訂や参考文献の整備につとめた。今後、川端研究書は増加してゆくと思うが、それらのなかにあって、本書の初版のはたした役割と評価

が、面貌を新たにして継承されれば幸いである。
昭和四十四年五月

長
谷
川

泉

初 版 序

私が川端康成に入ったのは「雪国」からであった。「伊豆の踊子」や「十六歳の日記」から入らずに「雪国」から入ったという入り方は、川端康成への入り方としてはオーソドックスでなかったかもしれない。いきなり「雪国」に入り、そして「雪国」に打ちのめされ、圧倒された。今にして思えば、高校生としての「雪国」の読み方は甘っちょろいもので、ほんとうの読み方ではなかったことを痛感する。「雪国」を味読するには、人生の年輪が必要なのである。しかし、甘っちょろいなりに読んだ「雪国」の強烈な影響力は、大学生になった私に「『雪国』論」を書かせた。本書に収めた「雪国」論の原型である「Ⅰ」の部分は、学窓にあったころの執筆である。

川端康成への傾斜は、一高の文芸部委員をしていたころに、文芸部室で、過去の文芸部機関誌『校友会雑誌』を繰ったときに始まる。川端康成が『校友会雑誌』に発表した唯一の作品「ちよ」を発見して読んだことに始まる。「ちよ」は、すぐれた作品とはいえぬとしても、川端的な作品だと思った。川端文学の資質の開花は、すでに「十六歳の日記」にあるのだが、「ちよ」のなかにもそれはある。時計台の階段を高く昇りつめた一高文芸部室で、昔の『校友会雑誌』をめ

くるのに時を忘れた私の興味は、名のある作家たちの無名時代の青春文学の発芽をさぐることにあった。そして『校友会雑誌』に発表された川端康成の作品は「ちよ」一作であるだけに、私は「ちよ」に執着した。本書の「伊豆の踊子」のなかで、その原型の体験が一部描かれている「ちよ」に、かなりの頁をさいたのも、高校時代からあたためられていた執着のなせるわざである。

川端康成に最初に会ったのは、私が高校三年生のころであった。昭和十四年である。一高文芸部委員として、白井健三郎・松本彦良とともに、当時鎌倉の二階堂にあった川端康成宅を訪問した。その時の友人松本は、東北大学哲学の教授になったが、今は亡い。私と白井がおもに喋ったのだが、ものをいわない川端康成の前で、松本がいかに所在なく身をすくめていたか、今もなお記憶に新しい。

川端康成の寡黙は有名である。あの特有の眼光のみ鋭く、対座の相手をぎょろりぎょろりと凝視して、自分の方からはことばを発しない。かけだしの女性編集者などは、この眼光に射すくめられて、身のおきどころもなく泣き出すといわれるくらいである。秀子夫人の書いた文章にも、夫川端のこの特徴はよく書かれている。川端康成自身にも、その述懐がある。高校生の私たちが、当時そんなことを知っていようはずがない。高校生らしい気楽さで先輩を訪問したまでだが、玄関を通してからは、まさに冷汗である。

私たちが十くらい喋って、川端康成が一を応答する。自然に、話題がとぎれる。その休止の時間には、縁側の小鳥たちのさえずる声だけが耳に入ってくる。当時の川端康成は、小鳥をたくさん飼っていた。

その消しがたい印象は、今もってあざやかである。同じ鎌倉でも、堀辰雄や神西清に請じられた時の印象とは、きわめて異質である。病床にあった堀辰雄が、無遠慮な後輩高校生の来客にもこまかく気をつかったり、神西清が、静かに多くを語り、はてはフォーレのレコードをいっしょに聞こうといったのとは異なる。その堀辰雄も、神西清もすでに世を去ったが、川端康成はますます健在で、旺盛な筆力を見せている。新感覚派の生き残りとしても、すでに唯一といってよい存在になった。そしてなお川端康成のはらむ可能性への期待は大である。その期待は、ただに日本というわくをも越える。

川端康成ほど、繊細でありながら、他人や、文芸批評などに傷つけられない小説家はいなからう。川端康成を論ずる者は、誰でもその空しさを痛感させられるはずである。川端康成は、それらの生贄の上に、やはり厳然として川端康成なのである。本書もまたその例外ではないか。呵々。

本書は、川端康成を論ずるに「バッタと鈴虫」「伊豆の踊子」「雪国」「名人」の諸作品をもつてし、それに概論的な展望を添える構成をとった。

「伊豆の踊子」を論ずることは、「伊豆の踊子」のみに限局されず、「十六歳の日記」「ちよ」、そして「篝火」など一連のちよもの、「少年」「美しさと哀しみと」などの諸作品を包括する。ゆえに、本書でとりあげた作品の数はすくなくように見えても、川端文学の神髄に迫る意味では、広い展望を得られるものと思う。

口絵四頁と、各扉には写真を収めた。写真が文獻的なものに偏する印象を与えるかもしれないが、それはそのような方針をとったからである。

本書に収めた論文は、新稿を加え、補訂・改稿したものが多い。初出についての記録は巻末に付載した。

昭和四十年四月

長谷川 泉

目次

増補版序
初版序

川端康成入門……………一

川端文学とノーベル賞……………三
——盈虚の美学の微茫な接点——

康成と利一……………五

十六歳（十四歳）の日記……………七

招魂祭一景……………二三

バッタと鈴虫……………二五

伊豆の踊子……………二七
——「ちよ」「少年」「美しさと哀しみと」に触れて——

浅草紅団……………二七

● 雪 国	三〇七
名 人	三七九
「千羽鶴」と「山の音」	三九三
——「ほくろの手紙」「水月」に触れて——	
● 古 都	四三三
「眠れる美女」と「片腕」	四四七
川端康成における詩と真実	四六一
年 譜	四六九
参考文献	五〇九
収載論文初出	五一九

川端康成入門

川端 康成 明治三十二年六月十一

日、大阪區北區此花町に生る。中學を経て、第一高等學校を卒へ。東京帝國大學英文科に入學、後國文科に轉じ目下在學中、大正十年友人四名と、第六次「新思潮」を創刊す。『招魂祭一景』『油』等の作あり。現住所、本郷區千駄木町三八牧瀬方。

「文芸年鑑」初記載の川端康成

大正12年刊で、この年鑑には横光利一は採られていない。

「君の名に傍^{そば}へて僕の名の呼ばれる習はしも、かへりみすればすでに二十五年を越えた。君の作家生涯のほとんど最初から最後まで続いた。」——これは、昭和二十三年一月、横光利一の死に際し、川端康成がその霊前に捧げた弔辞の一節である。大正の末期から、昭和の初期にかけて、文壇の華やかな彩りであった新感覚派の文学は、横光と川端の二人によって担われた点が多い。そして、両者の関係は、川端と横光ではなかった。あくまでも横光と川端であった。

新感覚派の拠点であった『文芸時代』同人処女作号（昭和二・三）に、横光は「笑はれた子」を載せ、川端は「招魂祭一景」を載せた。「笑はれた子」は「面」の題で『塔』に掲載され、「招魂祭一景」は『新思潮』に掲載された。前者は大正十年、後者は大正十一年の発表であった。だが、処女作としてうたわれたこれらの作品以前にも、横光は「夜の翹」「神馬」「犯罪」「宝」「印象」「顔を斬る男」「月夜」「南北」などを活字にしている。川端にも、もちろん「招魂祭一景」以前に活字になった作品はある。後年発表され「言葉通りの私の処女作である」と、作者自身認めている「十六歳の日記」のときすぐれた作品もある。川端十六歳の時は、大正三年である。しかしながら、文壇登場は横光に一日の長があった。その意味では、川端は、横光の名にそえて呼ばれる位置において、文壇の登竜門をくぐった。横光の処女創作集「御身」は大正十三年に出た

が、川端の処女創作集「感情裝飾」は大正十五年に出た。

新感覚派の衰滅以後においても、横光は常に文壇の陽の当たる場所を歩んだ。変貌の作家である横光は、新感覚以前には、自然主義的手法をとった一時期があったが、新感覚派の衰退後においても、新心理主義、純粹小説の提唱、東洋と西洋の対決から祖靈を謳歌する日本的回帰の歩みなど、さまざまな問題提起をした。横光が文学の神様の俗称にまつりあげられていたのに対し、川端の文学はどちらかといえば孤高であった。川端文学に心酔する限られた世界にのみ、享受の扉を開いていたのである。その意味において、横光の名にそえて川端の名の呼ばれる習わしは、ほぼ横光の死にいたるまで続いたのである。「君の名に傍へて……」という川端の切々たる横光利一弔辞は、謙辞ではなかった。

だが、事情は今や一変した。横光は、終戦後の社会と思想の混乱期のさなかに、最後の大作「旅愁」を完成し得ずして逝いた。西欧の洗礼を受けた日本人インテリの知的運命を追求する命題にいどんだ横光の意図は壮とすべきであるが、横光はそのテーマの重量におしつぶされて挫折した。横光の「旅愁」が永遠に未完に終わったのは作者横光の肉体の生理の崩壊のためばかりではない。今後の日本人が、よけて通ることのできない痛切なテーマにいどんだ横光の精神の生理の崩壊にも重要な原因がある。未完の「旅愁」の最終部分「梅瓶」は、その事実を痛ましく物語っている。

それに対し、川端は「続雪国」の稿をもって、戦中・戦後にわたる名作「雪国」を完結した。そればかりではない。川端世界の燦銀の文学魂の昇華は「山の音」「千羽鶴」に見られた。川端世界の深化である。横光が常に大きな問題意識の重量におしひしがれながら、ぎすぎすした未完成的な作品群を残していたのに対し、川端文学は切りとられた微茫な小世界に沈潜しながら、芸術の三昧境をひそかに暖め、洗練と完成を期していたのである。そして、その文学史的評価は、横光利一弔辞において、その時点では決して謙辞ではなかった川端のことばを、今日においては謙辞と感じ取らせるまでに逆転して来ているのである。未完の「旅愁」をもって文学的生命を燃焼しつくした横光利一と、「雪国」を完成しさらに「山の音」「千羽鶴」で川端世界を深化してみせた川端康成とは。

二

作品に反映するものは、作家の全人間像である。川端がいかに「禽獣」を厭い、その主人公を自己厭悪の対象として描いても、あるいはまた「雪国」の主人公島村を落莫たる虚像として描いても、「禽獣」は川端以外の誰にも書けぬ作品であり、島村は川端自身を反映する人物たることには変わりはない。作中の全人間像の反映とは、否定的契機においてとらえられた形成のしかたにおいても、悲しく反映する。ゆえに、「作家の人間形成のされ方は、作品とは無縁ではあり得な